哲学 36 号（2018）42－55

ベルクソン『物質と記憶』に於ける知覚の限定作用

窪田　徹

本論文は、ベルクソン『物質と記憶』（*Matière et mémoire*,1896）の第一章に於けるイマージュ論を土台としつつ、人間存在の根本に関わる知覚の限定作用を明らかにする[1]。

これまで同書に関して、人間の本質に関わる論点として「知覚」（perception）の問題が扱われたことはなかった。従来、ベルクソンに関する知覚の論点は、心身二元論の枠内にあって身体と記憶の関係性を考察する過程で取り上げられるだけであり、人間が生きるうえで知覚するということの根本的な意味は考えられてこなかった[2]。『物質と記憶』に関する既存の解釈では、知覚のみならず、「身体」（corps）・「物

---

[1] ベルクソンの著作の引用及び参照箇所は、すべて Henri Bergson,*ŒUVRES*（édition du centenaire）P.U.F.,5édition:1991,mai.による。尚、『物質と記憶』の原作名は次のように略記する。MM :*Matière et mémoire,*（1896）

[2] 従来の研究では、例えばドゥルーズが『ベルクソニスム』（*Le bergsonisme*,1966）に於いて、「差異」（différence）という彼独自の哲学概念を核としながらベルクソンの作品を発表順に論じている。その研究スタイルには優れた点が多く、とりわけベルクソン哲学に於ける記憶を、あらゆる「差異」の「潜在的共存」（coexistence virtuelle）として解釈する点は興味深い。様々な「差異」が世界の中で多彩に具現化される可能性として記憶の次元が論じられているのである。だが、ドゥルーズは『物質と記憶』に関して、記憶が現実化される際に身体と如何に関係するのかという心身問題を核心に考えている。彼には、同書の中で人間の本質行為としての知覚の意味を具体化し、人間は何の為にこの世界に存在するのか、という問題意識は見られない。

最近のベルクソン研究では、セバスチャン・ミラヴェット（Sébastien Miravète）が、カントの「物自体」に対抗してベルクソンのイマージュ概念を基盤にすれば、実在全体から人間を切り離さずに知覚の条件を明らかにできると論じている。ミラヴェットは、これによって世界の実在性を認める諸科学と哲学が可能となり、観念論的ではない認識論が構築できると考えている。このような彼のベルクソン解釈は、単なる神経系の理論としての知覚論ではなく、人間の本質に迫る可能性を持つだろう。しかしながら彼の論文は、時間論にまつわる抽象的な議論が前面に出過ぎており、人間本質としての知覚の意味を具体化していない。cf.Gilles Deleuze,*Le bergsonisme*,P.U.F.,(1966),pp61-70.『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』所収、セバスチャン・ミラヴェット「哲学と

質」（matière）・「記憶」（mémoire）といった用語が人間の本質に迫るタームとして具体的に追究されてはおらず、記憶と表裏一体の知覚が人間の本質を如何に明確化するのかという問題意識は希薄であった。だが、こうした論点は、同書第一章で頻出する「イマージュ」（image）概念を土台にして考えるならば、人間存在の基礎を構成し、人間の本質を把握するうえで不可欠な論点として捉え返すことができるのである。わけても、イマージュ論を土台として人間の身体の役割を考えるならば、知覚の限定作用は人間の根本に関わる重要な論点であることが分かる。人間という生命がいつの時代にあっても一個の身体を持つ存在として生きる以上、人間が存在することの意味は、必ずその本質行為としての知覚から生じてゆくのである。本論文に於いて、我々はこうした観点から『物質と記憶』の内在的な解釈を徹底的に行いたい。それによって、身体と記憶の関係性の核心に人間の知覚の論点を据えることから、真に能動的な本質を持つ知覚の限定作用が人間に於いて如何なる意味を持つのか、という問題を明らかにしたい[3]。

そこで、本論文の第一章では、『物質と記憶』の主要概念であるイマージュを取り上げ、この概念の内で人間の知覚がどのように捉え得るのかを論ずる。本章で我々が取り上げるイマージュの観点は、本論文全体の議論の基盤となるものである。

第二章では、人間の身体の本質的役割を論ずることから、知覚の本源的な傾向性を明らかにする。

以上の論点を踏まえたうえで、第三章では、同書に於ける知覚と記憶の関係、及び記憶の問題の形而上学的な背景を踏まえることから、人間存在の根本に関わる知覚の限定作用の意味を明らかにしたい。

1　イマージュの総体に於ける知覚の問題

認知心理学を定義する―ベルクソン哲学の知覚理論とブルーナーの認知心理学を通して」(山根秀介訳)、平井靖史他編、書肆心水、2016 年、159-174 頁を参照。

[3] 本論文では、ベルクソン哲学の根本概念である「純粋持続」（durée pure）については詳細に触れていない。この概念は相互浸透を繰り返し、外在化や空間化を拒む性質を持つ。しかし『物質と記憶』は、人間が高度な身体機能を用いながら、その知覚行為の内容を多彩に空間化してゆく状態を論じている。同書では、「純粋持続」がいわば世界の内に散乱して様々な具体性に結実する状態を考えているのである。本論文では、こうした論点の長所を具体的に強調する為に、あえて「純粋持続」の抽象性を前面に出すことはしていない。ちなみに『物質と記憶』に於いて同概念はわずかに二箇所、小さく触れられているのみである（cf.MM,321,322）。
cf.Henri Bergson,*Essai sur les données immédiates de la conscience,*(1889),p68.

1.1 人間本質を如何なる観点から捉えるのか

我々はまず本章にあって、人間存在の基礎を考えるうえで土台となるイマージュに関して触れておきたい。例えば、イマージュとしての物質については、『物質と記憶』第七版の序文で次の如く表現されている。

> 「物質を、我々が持つ表象に還元することは誤りであり、また、我々の中に表象を生み出すが、表象とは本性が異なるものとするのも誤りである。物質とは我々にとってイマージュの総体なのだ。そしてイマージュによって我々は、観念論者が表象と呼んでいる以上のもの、実在論者が事物と呼んでいる以下のもの、つまり〈事物〉と〈表象〉の中間にある存在を考える。こうした物質の概念はまったく常識的なものである。」(MM,161)

ここでは、イマージュを「〈事物〉と〈表象〉の中間にある存在」(existence située à mi-chemin entre la « chose » et la « représentation »)としている。これは、物質を人間の認知能力とは無縁の地平で「物自体」として考えるのは誤りであり、また、精神の中に表象としてだけ存在していると考えるのも誤りだという点を示す。つまり、観念論と実在論が表象と存在に分けてしまう以前の諸事物の拡がりがイマージュとして規定されているのである。上の引用では、「物質とは我々にとってイマージュの総体なのだ」とされているが、ここで肝腎なのは、人間の身体器官も物質である以上、イマージュの総体の一部でしかないという点である[4]。

では、こうしたイマージュを核心とする発想に於いて、我々がまず踏まえねばならない論点とは何だろうか？　それは、人間本質の考察という観点からすれば、一旦、その存在から「意識」という能力を剥ぎ取る必要があるということだ。人間の意識は、世界や自己の在り方を実に多彩な形で分析し解釈するだろう。こうした分析や解釈の根底には一つの共通点として、世界や自己に対する何らかの驚異や畏怖の感覚があるが、この感覚は、いつも意識の働きを土台にしている。本来、意識が無ければ人間は何も感ずることはできない。しかし我々が、ベルクソンのイマージュ概念を土台として人間本質を考えるならば、意識作用は、それが如何なる意味合いを持つものかという点を含めて、一度大きく捉え返す必要があるのである。

---

[4] 本論文に於いて「イマージュの総体」あるいは「諸イマージュ」といった表現を使う時、それはあくまで、存在する限りのすべての物質を指している。人間の身体もまた、それが物質である以上は、諸イマージュの一つである。あとで本論文第三章の第二節で考えるように、こうしたイマージュの次元は、形而上学的な次元とは区別されるものである。

イマージュに基づいて人間を考えれば、意識作用の身体的基幹を成すと思われる大脳・脊髄・延髄等の存在も、イマージュの一つでしかない。こうした発想は『物質と記憶』の第一章に於いて頻出するものである。例えば、同章でベルクソンは、中枢神経系は物質界全体としてのイマージュの条件であることはできない、と述べている(cf.MM,171)。つまり、中枢神経としての脳は元来、イマージュの総体の一部であり、それを土台としてすべてのイマージュを描くことはできないのである。こうしたイマージュの総体は、人間にとって客観的世界として認識できるものではない。人間の身体も常にイマージュの一部であり、イマージュは、人間がそれを意識する以前に多種多様な影響を与え続ける存在だからである。なにより、ここで我々が肝腎だと考える点は、イマージュを核心とする議論は、人間の認知能力に関する議論に留まらないということである。それは必ず、諸イマージュの中で我々が何故に存在するのかを問う、人間の存在論となるだろう。このような問題を『物質と記憶』に於いて具体的かつ詳細に探究しようとするならば、それは、人間の本質行為としての知覚を問うという根本的な論点に収斂してゆく。本来、同書にあって、こうした論点の中で取り上げられるべき要素こそが、「知覚」なのである。

人間の身体もその一部であるイマージュの中で、人間の本質を具体的に把握しようとするならば、我々は、人間の本質行為としての知覚の意味を明らかにしなくてはならない。しかし従来、『物質と記憶』の研究に於いて、イマージュ論を核心としながら、知覚の問題を取り上げ、そこに人間の本質を具体化しようとする論点は存在しなかった。同書に関するこれまでの解釈では、記憶が触発する知覚内容が人間の本質をどれほど具体化するのかという問題意識は希薄であった。だが、知覚という用語を、同書第一章のイマージュ論を土台として考え直すならば、それは人間の本質を把握するうえで不可欠な用語として捉え返すことができる。人間という生命は一個の身体を持つ生物として生きている限り、その存在者のすべての経験は、イマージュの総体の中で彼が知覚するという事実から始まるのである。これは、如何なる知覚であろうとも、人間が具体的な身体機能を持つ生物であるという制限された事実に基づいている。そうであるならば、人間の存在の意味は必ずその本質行為としての知覚から生じてゆくとは考えられないだろうか？　本論文に於いて、これから我々が掘り下げようとする論点はこのようなものである。

1.2　生命の根本的な傾向性としての知覚

人間の知覚を具体的に考えるうえでは、例えば視覚・触覚・聴覚等が代表的なものだろう。それらはまず、外的対象を認知する能力として考えられる。人間は、日

常生活の中で理論的な認識を形成するずっと以前に、周囲を取り囲む自然を客観的な対象として把握しているのである。例えば、視覚によって認められる対象は、身体にとって直接的な刺激としては感じられない。それは、さしあたり外界の潜在的な影響に留まる。触覚によって認められる対象は身体に様々な影響を齎すが、その刺激の具体的な内容は対象物の性質による。また、聴覚によって感ずる刺激は、その刺激が自分の声や身体が原因でないと分かっている限り、基本的に何らかの距離感覚を伴って認知されるものである。こうした知覚能力を発揮する際に、我々がけっして看過してはならないのは、外的対象の認知をするうえで目安となっているのが、いつも身体の表面だということである。いわば、人間は自分の身体の表面を「境界線」として、身体に刺激や影響を与えるものを「外的対象」として認知する傾向を持つのである。この、自分の身体の表面を「境界線」として認めながら活動する人間の在り方は、幼少期を過ぎて身体が成熟し、生活の中で或る程度の経験を積む過程で強固なものとなる。階段を駆け上がってゆく際の「トントントン」という音は自分の足裏がたてている、ということを分からない大人はいないだろう。そもそも、自らの身体の表面を「境界線」として無意識の裡に認知するからこそ、人間は地面の上に立ちながら、対象との間で距離を取り、手に物を取ったりできるのである。

だが、このように、身体の表面を「境界線」として感じつつ多様な活動を展開する人間の在り方を反省するということが、前節で述べたように、人間から一旦、「意識」を剥ぎ取ることに繋がるのである。意識を持つ人間は、自己と対象との間に常に距離を見据えながら活動する。しかし、最初から意識存在として人間を措定せずに、イマージュの総体の中で捉え返せば、その内面状態は如何なるものとして把握できるだろうか？　こうした論点こそが、人間の知覚を根本的に考える際に基礎となる。この論点を考察する場合、『物質と記憶』の第一章に於ける「感情」(affection)に関する論点が大いに参考になるだろう。そこでは「感情」というものが、知覚主体と対象との距離がゼロになった地点で考えられているからである。

> 「ところで極限まで達して、まったく距離の無い状態、つまり知覚する対象が我々の身体と一致する状態、要するに我々自身の身体が知覚すべき対象である状態を仮定してみよう。その時、このまさに特別な知覚が表現するものは、潜在的な作用ではなく現実的な作用だろう。まさしく感情はここに存するのだ。」(MM,205)

ベルクソンは、自分の身体に対する知覚を「現実的な作用」（action réelle）として、「感情」と呼んでいる。上述したように、意識主体としての人間は、自己の身体の表面を「境界線」として感じながら、外的対象を認知する。だが、知覚の対象が

自分の身体である場合、「境界線」の感覚は何の目安にもならないのだ。ここで、我々がけっして見落としてはならない点は、諸々の物質的対象と人間の身体とが同等の視点で捉えられている、ということである。これは、人間から意識を剥ぎ取った際に見えてくる最初の様相であろう。生命存在が何らかの知覚をするにあたって、最初は己の身体とそれ以外の対象物との間に明確な区別はない。区別は知覚された後の反省によって生ずるのである。大脳・脊髄・延髄もまた物質界全体のイマージュの一つであり、人間はイマージュの総体を離れて生きることはできない。こうしたイマージュの総体の中で、人間は自分の身体という物質イマージュを「感情」として知覚するのである。この観点で肝腎なことは、つまり、眼・耳・手といった知覚機能を持つ生物であっても、それらの機能を働かせるずっと以前に、自分の身体をぼんやりと知覚しているということである。このような知覚は、生命にとって些かも意識的な区別を伴った知覚ではないだろう。それは唯、何かを知覚しようとする生命の根本的な傾向性を表わすのみである。人間もまた、何かを知覚しようとする一つの生命として、諸イマージュの中に存在しながら、己の身体としてのイマージュを漠然と「感情」として知覚するのである。

このような、人間本質を明らかにするうえで人間から意識を一旦剥ぎ取るという論点は、『物質と記憶』の第一章で殊更に強調されている問題ではない。しかし我々が、イマージュ概念の内で人間本質を探究しようとすれば、この問題提起は不可欠である。イマージュを核心とする議論は、けっして人間の認知能力にまつわる議論には留まらない。それは、イマージュとしての物質界に人間が「在る」ということによって生起する、どこまでも固有な意味を鮮明にするのである。人間は身体を「感情」として知覚しつつ、やがて、あらゆる刺激を自分に直接関わるものと、そうでないものとに区別して受け止める意識的主体となるだろう。こうした意識的主体が持つ「感情」は、成熟した身体を持つようになれば、豊かな精神内容を有する内面性として自覚されてゆくだろう。そして、多種多様な物質的対象が存在する領域は、人間が行動を起こす為の広大な世界として様々な形で具体的に捉え返されてゆくだろう。こうしたことのすべては、人間の知覚によって始まるのである。イマージュの総体の中に人間の知覚が生ずることによって、そこに、明確な行動と認識へ向けた重大な契機が生まれるのである。

このような論点は『物質と記憶』に於いて、人間本質を明らかにする論点として前面に出ている訳ではない。同書の第一章では、以上のような問題は生物の一般的特質として考えられている。だが、イマージュの総体に於ける知覚の問題を人間の本質行為として捉え返すならば、それは、人間存在の意味を明らかにするうえで最大の論点となるのである。次章以降、我々はこの問題をより具体的に掘り下げていきたい。

哲学 36 号（2018）42－55

2　知覚の本質としてのイマージュの限定

2.1 身体の役割

知覚を人間の本質行為として掘り下げるならば、我々は身体の役割を根本的に捉え返す必要がある。この論点を考察する為に、本章ではまず人間をイマージュの総体の中で「行動の中心」(centre d'action) とするベルクソンの見解を取り上げたい。この点に関して、『物質と記憶』の第一章では次の如く述べられている。

「まず、諸々のイマージュの総体があり、この総体の中に〈行動の中心〉があって、これに対して利害関係のあるイマージュが反射するように思える。こうして知覚が生まれ、行動が準備されるのだ。私の身体とは、これらの知覚の中心に現出するものなのである。」(MM,196)

知覚を論ずる際に重要なのは、人間が行動するということである。本来、身体は中枢神経系に至るまで物質によって構成されており、物質イマージュの総体の一部でしかない。だが上の引用文のように、イマージュの総体に於ける「行動の中心」としての人間は、自己の身体イマージュを知覚しながら、それ以外のイマージュを鮮明に区別してゆくのである。我々は前章の第二節に於いて、イマージュの総体の中で、人間が自己の身体イマージュを「感情」として知覚するという点を重視した。この次元が、いわば生命が存在する根本的な次元だからである。そうである限り、その知覚は漠然としており、意識的ではないだろう。繊細な知覚機能を持つ生物であっても、その機能を働かせる以前に、唯、身体をぼんやりと知覚するのである。だが人間は、いつまでもその状態に留まっている訳ではない。この点を明瞭にするには、例えば、上の引用文に於ける「私の身体とは、知覚の中心に現出するもの」とされている点を取り上げるのがいいだろう。これはつまり、多様な知覚を繰り返しつつ、イマージュの総体から一つの生命体が具体的に現われ出す状態を示すのである。人間という生命は、それ以外の物質イマージュとの間に利害関係を測りながら、物質イマージュの総体の中に「私の身体」（mon corps）という固有の感覚を現出させる存在なのである。

それでは、この「私の身体」という固有な感覚の意味とは何であろうか？　前章の第二節で触れたように、人間は行動を展開し、その能力を自覚しながら、諸々の対象物との間で自己の身体の表面を「境界線」として感じてゆく。このような感覚

は、「私の身体」を自覚することによってより一層強固なものとなろう。総体的イマージュの中から「私の身体」という感覚を現出させる生命は、身体の表面を「境界線」として感じ取りながら、自らの「内面」の知覚をより豊かなものにするに違いない。人間に於けるこのような感覚は、やがて、その身体が成熟して諸機能が強力かつ精密になるにつれて、より一層具体的なものとなろう。このような観点に於いて、我々が人間の本質としての知覚を論ずるうえで重要な論点とは何であろうか？それは、大した変化も無く一様であったイマージュの総体の真っ只中に、「私の身体」を知覚する生命によって、イマージュの相互に具体的な利害関係が生じてゆくという点である。

2.2　イマージュの限定

本論文では、『物質と記憶』第一章のイマージュ論を核心にして論じているが、諸イマージュの内に生ずる利害関係という問題は、人間の知覚の特質を論ずる際に重要な論点となる。人間という生命は、物質イマージュとしての自己の身体を知覚することによって、同時に、周囲の諸イマージュを利害関係の網の目の中で捉え返すのである。無論、人間の身体能力には限界があるだろう。だが、人間は可能な限り己の身体能力に即した形で、イマージュの総体から、自分に利害関係のあるテリトリーを繊細かつ具体的に限定してゆくのである。我々がこういった観点を『物質と記憶』の中で捉えることは、人間の本質を明瞭にする為に不可欠となる。例えば同書の第一章では、このような知覚の限定作用が次の如く論じられている。

> 「知覚は権利に於いて全体のイマージュであり、事実に於いて利害関係のあるものに縮減されるのだから、説明すべきことは、如何に知覚が生ずるのかではなく、如何に知覚が自らを限定するのか、ということである。」(MM,190)

ここで、「知覚は権利に於いて全体のイマージュである」とされている理由は、人間がイマージュの総体と共にある限り、権利上は、人間の知覚は無制限であるからだ。ところが実際は、人間の知覚能力はイマージュのすべてを感じ取るようにはできていない。その知覚は、自己の身体との具体的な利害関係を計測しつつ、いわば、イマージュの総体の内に限定的に「私の身体」という感覚を現出させるのである。このように、人間はイマージュの全体を自己の利害関係に即して認知してゆくが、これこそが、人間の本質行為としての知覚を論ずる際の基礎となるのである。これは一面では、人間の認知能力の限界を表わすだろう。しかし他面では、人間の知覚

によってこそ、全体のイマージュから真に活用可能な特定の物質イマージュ群が浮き出してくるのである。人間の身体もまた、数多ある物質イマージュの一つに過ぎない。とはいえ、人間は自分の身体を「感情」として知覚しながら、同時に、その周囲に自分が生きる領域としての特定のイマージュ群を知覚して、それらを自由に対象化するのである。ここに於いて本質的なことは、知覚がいたずらにイマージュの総体にかかずらうことなく、むしろ、そこから何ものかを選び取る形で生起しているという点である。人間が存在するということ、唯それだけで、無辺際のイマージュから特定のイマージュ群が限定されて浮上する。人間の身体の役割とは、すべてのイマージュを認知するということにはない。むしろ、与えられたすべてのものから何ものかを限定して対象化する、ということが肝要なのである。

3　知覚の限定作用の意味

3.1　イマージュの総体に於ける人間の時間

人間の知覚は、特定のイマージュの領域を限定するものとして考えられる。このような人間の知覚の限定作用は、とりわけ、その中心で記憶の働きと併せて論ずることが欠かせないだろう。人間の身体は生きている限り、豊かな内面性を持っており、それは過去の記憶と表裏一体だからである。この論点に関して、例えば『物質と記憶』の第二章では次のような記述がある。

> 「私の身体は或る瞬間で考えれば、それに影響する諸対象と、それが作用する諸対象との間に位置する一つの伝導体に過ぎない。しかし反対に、流れる時間に戻すならば、それは私の過去が行動に変わるちょうどその点にいつもあるのだ。従って、私が大脳機構と呼んでいるこの特殊なイマージュも、私の過去の表象の系列を絶えず終わらせるものであるから、それらの表象が現在へと及ぼす最後の延長部分であり、現実、つまり行動との接合点なのである。」(MM,224)

ここでは、人間の身体がまず「伝導体」（conducteur）として語られている。これはつまり、イマージュの全体にあって、身体もまた刺激を受けては返す物質イマージュの一つだからだ。これは、人間が身体を有して生きている間は不変の基本原則であろう。しかし同時に上の引用文では、大脳機構が「(私の過去の）表象が現在へと及ぼす最後の延長部分」(括弧内、筆者補足)なのだという記述も見られる。我々は第一章の第一節に於いて、大脳・脊髄・延髄等もイマージュの一要素でしかない

という点に言及したが、ここで同時に肝腎なことは、諸イマージュの一つである脳が、過去の記憶を現在の行動に生かすという、唯この一点に於いてのみ、他のイマージュとは異なるという点だ。複雑な脳機構を持つ人間の知覚には、数え切れない程の記憶が伴う。とりわけ上の引用文にあるように、人間が「流れる時間」(le temps qui s'écoule）の中に生きる時、その身体は極めて固有な能力を発揮する。これは、我々が前章の第二節で論じた人間身体の役割（諸イマージュから何ものかを限定し対象化するという根本的な役割）を考える際に、最も重要なものとなろう。諸イマージュの中で、人間の身体イマージュだけが、あらゆる過去を活用しながら、自己の現在を自覚するからである。この意味で、脳機構という物質イマージュこそが、「今、ここにある」ということに関する認識の最大の契機を形作るのである。そして、現在というものに明確な立脚点を持つ生命存在だけが、独自の未来を望むようになるだろう。このように人間の身体は、物質イマージュの一つでありながらも同時に、イマージュの総体の中で独自の存在の構えを確立してゆく。記憶が付随する知覚によって周囲の対象を認知する時、人間はイマージュの総体の一部でありながらも、過去・現在・未来という一種独特の動性を持つ時間の内に生きるのである。こうして、人間の知覚は、独自の時間感覚に裏付けられながら、認知し得るすべての領域を自己の行動の場として限定してゆく。このように、人間の知覚の限定作用は、与えられたイマージュの領域に、いわば人間生命に固有の場を拓くのである。

3.2　人間の能力の限界と知覚の限定作用

それでは、そもそも、知覚の限定作用の本来的な意味とは何であろうか？　我々がこの問題を明確にする前に、『物質と記憶』に於ける記憶の問題の形而上学的な背景に触れておく必要がある。これは、知覚の限定作用の意味を具体化する際に不可欠となるからである。同書の第三章では、人間の現在の行動と何ら関わりを持たない記憶が「純粋記憶」(souvenir pur）として論じられており、形而上学的な背景を考えるうえで重要な要素となっている。

「純粋記憶は拡がりを持たず無力であり、如何なる仕方でも感覚を持つことがない。私の現在と呼ぶものは直接的未来に対する私の態度であり、差し迫った私の行動である。私の現在とは、従ってまさに感覚・運動的である。私の過去の中から、この行動に協力し、この行動に組み込まれ、つまり役立つものだけがイマージュとなり、従って少なくとも生まれかけの感覚となる。だが、過去はイマージュとなるとすぐに純粋記憶の状態を去って、私の現在の或る部分と融合する。故に、イマージュへと現実化

された記憶は、この純粋記憶とは深く相違するものである。」(MM,282-283)

まず、ここで肝要な点は、「純粋記憶は拡がりを持たず無力であり、如何なる仕方でも感覚を持つことがない」（le souvenir pur, étant inextensif et impuissant, ne participe de la sensation en aucune manière）という点である。「拡がりを持たない」ということは、一切の空間性を伴わないということであり、「感覚を持つことがない」ということは、それがまったく現実的な抵抗感覚を持たない、ということである。つまり端的に言うならば、純粋記憶は諸事物が存在する次元とは別にあるのだ。前節で述べた如く、人間はその知覚が記憶に裏打ちされることから、諸イマージュの内で時間を形成し、独自の存在の構えを持って生きてゆく。しかし、人間があらゆる場面で用いる記憶は、あくまで人間の時間を生きるうえで役立つ記憶だけなのである。現在に於いて活用されない大部分の記憶内容は、純粋記憶として身体からはみ出しており、イマージュの次元とは別に有り続けるのである。

それでは、このような記憶の問題の形而上学的な背景は、知覚の限定作用の意味を明確化しようとする時、如何なる重要性を持つのか？　この点を考えるには、例えば『物質と記憶』の第四章に於いて、記憶こそが人間の精神である、とされている点が参考になるだろう（cf.MM,354）。人間は誰もが生活をする中で、数多の知覚行為をしながら自分の内に記憶を蓄積し、その精神を刻一刻と形成してゆくものである。このような、刻一刻と変化し成長する精神の働きは、生命の本質的な働きそのものであろう。しかし、『物質と記憶』では、「生命」（vie）というものに関する明確な定義はどこにも見当たらない[5]。同書はまず、生物の一般的な知覚行為をイマージュ全体の中で論じており、諸生物とは区別される生命自体の抽象的・観念的な本質を論じている箇所は見当たらないのである。とはいえ、人間が形成する過去・現在・未来という時間の在り方は、そもそも、知覚能力を土台とする生命力の固有な発露といえよう。我々が第一章の第二節で論じたように、生物は最初、諸イマージュの中で自分の身体を唯ぼんやりと「感情」として知覚する。だが人間は、こうした状態を保持しながら、過去・現在・未来としての時間を形成し、豊かな動性を発揮するようになる。そして、第二章の第二節で論じたように、人間の知覚能力は、イマージュの総体から何ものかを限定し対象化するという性質を持っている。この

[5] 『物質と記憶』第七版の序文には、「生への注意」（attention à la vie）という概念がある。だが、これは生物の精神状態が如何に外化されて行動に結び付くのかを考えるものである（cf.MM,166）。ちなみに、『創造的進化』では、無限に続く創造としての生命の領域が、「直観」（intuition）によってのみ到達できる形而上学的次元として考えられている。しかし、同書のこうした点については、本論文の知覚の論点から大きく離れるので詳論していない。cf.Henri Bergson, *L'évolution créatrice*,(1907),p646.

ように、知覚の限定作用とは、時間の形成も含めて、生命の基本的な働きとして現われるものといえよう。人間は他の生物種と同様に特定の身体機能を持つ生命存在ではあるが、生命そのものを具体的に知覚し認識することはできない。また、人間は、無機物をいくら精緻に組み合わせてみても、生命ある存在を作り上げることはできないだろう。むしろ、生命は無機物を様々な形で利用し、自らの意欲や願望をこの世界に実現するといえようか。たとえ、物質が如何なる性質を持っていようとも、物質は大方、人間の精神の状態を外化する対象物として利用されるだろう。そして、このような人間の精神の働きが、生命の固有な発露である限りは、精神そのものである記憶内容の大部分は、諸イマージュの次元からはみ出してゆくのである。

そうであるならば、こうした記憶の問題の形而上学的な背景を踏まえる時、知覚の限定作用の本来的な意味は何であるといえようか？　これは、『物質と記憶』の第三章に於いて、人間身体の感覚・運動機能と過去の記憶の関わり合いを見ることによって明らかとなる。

「感覚・運動的諸装置は、無力な、すなわち無意識的な記憶内容に、身体を獲得して物質化する、つまり現在となる手段を与えるのだ。実際、或る記憶内容が意識に再現するには、純粋な記憶の高みから、まさに行動が遂行される地点まで降りてこなければならない。換言すれば、現在こそが記憶内容が応答する呼びかけの出発点であり、生命を与える熱気を記憶内容が取り入れるのは、現在の行動の感覚・運動的諸要素からである。」(MM,293)

ここで、「無力な、すなわち無意識的な記憶内容」と呼ばれているのは純粋記憶である。上述したように、純粋記憶は一切の空間性を持たず、現実的な抵抗感覚も持たない。しかし、感覚・運動機能と関係を持った純粋記憶は、物質的身体という具体的な拠り所を獲得することによって、現在という次元に生きるのである。このように、記憶内容が具体化されるには、中枢神経系を基盤とする極めて高度な感覚・運動機能が必須となる。つまり、あらゆる生命存在の中で人間だけが、記憶を活用しつつ、過去・現在・未来という明瞭な時間の観念を持つことができるのである。どれほど無力で無意識的な記憶内容であろうとも、それが人間の行動に役立つならば無駄にはならない。それは、人間の時間を支える要素として呼び出され、人間の生の為に活用されるだろう。

だが一方で、高度な感覚・運動機能を持つようになればなるほど、人間の身体は総体的イマージュの内で限定的な作用を発揮するしかなくなる。前章の第二節に於いて知覚の限定作用について強調したが、人間が有する身体機能は、知覚の限定作用を本質的な性格として持つのである。このような知覚の性格は、いわば生命の固

有な発露として、諸イマージュの次元に現われてゆく。人間の知覚は、事実上、自分にとって利害関係のある要素だけを抽出しつつ、自らの周囲に物質イマージュの再配置を行う。人間は存在するイマージュの全体を認識しようとしながらも、そこに自分に関わる要素だけを抽出し、自分が生きる世界を限定するのである。のみならず、人間の知覚には記憶の裏打ちがある。そもそも、人間が認識するすべてのものには記憶によって意味が生じている。意味を付与された特定のイマージュ群だけが、イマージュの総体の中で選り分けられて、人間に固有な世界として立ち現われるのである。このように、高度な感覚・運動機能を持つ存在は、イマージュの総体を自己の利害関係の枠の中で再編成する。本来、再編成されたイマージュ群の中でのみ、人間の過去・現在・未来としての時間の経過は通用するのである。こうした文脈から考えるならば、純粋記憶の形而上学的次元は、どれほどイマージュの次元と異なっていようとも、知覚の限定作用から生ずる具体性をいつも求めているといえようか[6]。いずれにせよ、人間の身体がイマージュの総体から如何に際立っていようとも、その能力は限られたものでしかない。人間の知覚は、あくまでも人間の行いとして制約を受けており、微小なものである。しかし他方で、このような制約や限定こそが、人間がまさに存在するということの意味を具現化するのである。人間は自らが再編成したイマージュ群を眼前にして、自分の能力の限界を感じ取りながらも、やがて、自分が生きる世界とは一体如何なるものかを把握する。このような認識の具体性は、それがどれほど小さなものであっても貴重なものである。それは元来、人間の知覚がなければ、諸イマージュの中にけっして存在しないだろう。あらゆる他の生物種の知覚は、基本的に、諸イマージュの中に組み込まれている。人間以外の如何なる生物であっても、自分の能力の限界と表裏一体のものとして、眼前の世界を鮮明に認識することはないだろう。人間の知覚だけが、こうした認識の唯一の契機となるのだ。このように、イマージュの次元の真っ只中へ、真に具体的で固有な認識を生じさせるということに、知覚の限定作用の本来的な意味が存するのである。

---

[6] アンリ・グイエ（Henri Gouhier）は『ベルクソンと福音書のキリスト』（*Bergson et le Christ des évangiles*）に於いて、ベルクソンの根本的な哲学精神とは、人間の生の領域を超越する次元、あるいは学者の悟性や科学の限界の向こう側に直観的な方法で神と魂を捉えるものではない、と述べている。こういったグイエの見解は、あくまでベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』（*Les deux sources de la morale et de la religion*,1932）を核心とする研究の中で表明されたものである。だが、グイエの見解は、我々が『物質と記憶』に於いて、純粋記憶の抽象性を人間の知覚との関係性の中で捉えようとする際に、かなり参考になるものと思われる。

cf.Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des évangiles,*Vrin,1999(1édition1962),p36.

哲学 36 号（2018）42－55

結語

我々はこれまで、ベルクソンの『物質と記憶』第一章の主題であるイマージュ論を土台として、人間の知覚の限定作用がどのような意味を持つのかを考察した。本論文の第一章で論じたように、イマージュ論の要諦は、諸々の物質的対象と人間の身体を同等の視点で捉えようとすることにある。このような中で、人間は何かを知覚しようとする一つの生命として、諸イマージュの只中で、己の身体イマージュを漠然と「感情」として知覚する。こうした点は、人間から意識を一旦剥ぎ取り、根本的な様相から人間の本質としての知覚を考えるうえで不可欠の論点となるだろう。第二章では、中枢神経系を基盤とした人間の知覚は、イマージュの全体の中でいつも限定的に作用するということを論じた。これは、人間の身体の役割と、その知覚の本質的特徴を具体化する際に重要な論点となる。そして第三章では、人間の知覚は実に多彩な記憶の裏打ちによって、与えられた諸イマージュを可能な限り再編成し、認知し得るすべての領域を自己の行動の場として限定するという点を論じた。人間が存在するということの意味は、必ずその本質行為としての知覚から生ずるのである。人間は、イマージュのすべてを知覚する為に存在するのではない。むしろ、所与のイマージュから何ものかを選び取り、そこから固有な認識を生み出すということが、人間の使命であるといえようか。このような論点は、『物質と記憶』で殊更に強調されているわけではない。しかしながら我々が、イマージュ論の内で人間本質を探究しようとすれば、こうした問題提起は不可欠なのである。人間が発揮する独自的な能力は、それが如何なるものであっても、いつも人間の行いとして限定されている。とはいえ、他ならぬこの限定こそが、イマージュの総体の内に固有な具体性を齎すのである。この具体性は、人間の知覚が存在しなければ、どこにも生ずることはないだろう。すべては、人間の有限性と表裏一体の知覚によってこそ始まるのだ。そして、これこそが、知覚の限定作用の本来的な意味なのである。